『曾我物語』における敵討ちの動因
――「実の父」の欠如と希求という観点から――

西塚俊太

序

建久四（一一九三）年五月二十八日の夜半、源頼朝が主催した「富士野の巻狩」の陣内において、曾我十郎祐成・五郎時宗の兄弟が、父・河津祐通の敵である工藤祐経を討ち取った。本論文はこの曾我兄弟による敵討ち事件をもとして生成された『曾我物語』について考察を進めていくことになるのであるが、その際に検討の主眼となるのは、この曾我兄弟による敵討ちが、『曾我物語』内で「名を後代に留めける」（三五頁）と評されている点である。

まずはこの論点の背景を『曾我物語』本文の叙述に即して確認しておこう。曾我兄弟の敵討ちに対してのこの「名を後代に留めける」という評が論じるに値する課題として注目されるのは、当時の時代状況によるものである。『曾我物語』には、曾我兄弟の母をはじめとして、兄弟の敵討ちを止めようとする多くの人物が登場する。その者たちが曾我兄弟の敵討ちに反対する理由は、兄弟が生きた時代が、源頼朝が世のあらゆる武士を統べるという「鎌倉殿の御世」（一七七頁）となっているという点に集約される。

曾我兄弟の敵討ちの背景には、「青葉〔若い反逆者〕[1]、霜に凋みて、白浪〔盗賊〕の声を上弦の夜の月〔源頼朝の武威〕にぞ澄ましける。これ偏に、羽林〔源頼朝〕の威風、世に超えて重き故にぞ候ひける。これにより て、青侍心をひそめ、公私争ひを留めて、一人として帰伏せずといふことなし」（三五頁）と表現される源頼朝の治世が存在していた。それは、全ての武士が新たに成立した「天皇王権の正当な護持者であり代行者である頼朝の秩序」[2]に従い、私闘が最早許されはしない世である。加えて言えば、曾我兄弟が討ち果たした親の敵・工藤祐経は、「随分の切り者にて御側去らずぞ勤仕しける」（一四一頁）という、源頼朝の側近であった。

であるからこそ、曾我兄弟による敵討ちは「事件」として、当時大きな衝撃を与えるものであったと推察される。『曾我物語』は事件の衝撃の大きさを次のように伝えている。

> 然るに、何ぞ、伊豆国の住人伊東次郎祐親（すけちか）が孫、曾我十郎祐成・同じく五郎時宗兄弟二人ばかりこそ、将軍家の陣内をも憚らず、親の敵を討って、芸を当庭に施し、名を後代に留めける。（三五頁）

右の引用文中の冒頭部における「然るに、何ぞ」という一言は、おそらく、現代の我々が想像する以上に大きな驚きを込めたものであったことだろう。『曾我物語』はかなりの分量を割いて、清和天皇の血を引く源頼朝が苦難を乗り越えて「日本国の大将軍」（三四頁）となっていく過程を、曾我兄弟による敵討ちに並行させて描き出している。[3]その「日本国の大将軍」の陣内において、頼朝の側近を討ち果たしたことこそが、「然るに、何ぞ」という驚愕を生んでいると言える。

それ故に問題となるのが、この一節が先に指摘したように、「名を後代に留めける」と結ばれている点なのである。あろうことか大将軍・源頼朝の陣内で発生してしまった一大事件が、「名」を後代に残すことになったと

伝えられている事態は、そのまま素通りすることのできない論点を含んだものであろう。これは、『曾我物語』読解の本質と深く関わる問題でもある。本論文は、以上のような問題関心のもと、曾我兄弟の敵討ちというものが一体いかなるものであったのか、曾我兄弟は何を求めて敵討ちをしたのか、敵討ちによって何が実現されたのかという諸点に関して、『曾我物語』の本文に内在する形で考察を進めていくことになる。

第一節　『曾我物語』の展開

さて、「土の匂いのする文学」[4]とも評される『曾我物語』は、曾我兄弟による敵討ちという史実をもとにして、おおよそ次のような筋をたどって展開される物語である。[5]いささか長くなるが、考察の下敷きとして確認しておこう。

まず『曾我物語』本文は、曾我兄弟による敵討ちについて、「その敵人は、すなはち一家の輩、工藤左衛門尉祐経なり。その由緒をいかにと尋ぬれば、先年、所帯〔財産・地位・所領・官職〕を争ひし故により、親昵（しんぢつ）〔親類・親族〕を誅せしその報ひとぞ聞えける」（三五頁）と語り出す。つまり、この敵討ち事件というものが、「一家の輩」のうちで起きたものであり、もとは「所帯」を争うものであったとされているのである。

この「一家の輩」同士で起きた「所帯」争いとは、複雑な血縁関係を有する伊東一族の長・伊東武者祐継（すけつぎ）が四十三歳にして亡くなる折、まだ九歳であった息子・金石（後の工藤祐経）に伊東・河津の両所を継がせるという遺言および「利券文書」（三九頁）を残したにもかかわらず、祐継の義弟である河津次郎祐親（後の伊東祐親・伊東入道）がそれに従わなかったことに起因したものである。

祐親は祐継の死後、まず自身が伊東荘に移り、河津の館を息子・三郎祐通（曾我兄弟の父）に譲る。祐親は、「兄のために忠ある由にて、後家にも子にも勝れて孝養の精誠を致す」（四〇頁）というように追善供養をし、また、「金

石には心安き乳母を付けて養ひつつ、遺言を違はずして十三と申せしには元服させ、宇佐美の工藤次祐経と名乗らせ、娘の万劫に合せて、次の年の秋、引き具して上洛し、小松内大臣重盛、その頃は大納言にておはしけるに見参に入れにけり」（四〇－四一頁）と、後見人として十分と思われる働きを見せている。ただし、祐経を都に置いたままにし、「伊東・河津ともに祐親一人にして押領して、祐経には屋敷の一所も配分せず」（四一頁）という一点が、祐継の遺言と完全に異なった扱いとなっている。

これが先に指摘した「一家の輩」同士の「所帯」の争いの内実であり、成人した祐経が頻りに「訴訟」（四一頁）をするも、祐親の賄賂工作などにより、「道理なきも道理と」（四一頁）なってしまう。『曾我物語』はこの事態について、「古より今に至るまで、欲界の衆生、欲心に耽くる習ひこそ悲しけれ」（四一頁）と、祐親の「欲」として表現している。

その後この所領をめぐる争いは、「所帯において半分づつ知行すべき由、本家大宮の令旨ならびに領家の御教書」（四一頁）を得るのだが、祐経はこの決定を不服とし、祐親・祐通親子の殺害と、伊東・河津両荘の支配を思うに至る。事態をいち早く察した祐親は守りを厳重に固めると同時に、「祐経、我がために後ろめたき者なり」（四三頁）と感じ、娘・万劫を取り返し、相模国の土肥弥太郎遠平に嫁がせた。そこで祐経は、年来の郎従である大見小藤太と八幡三郎の二人に暗殺を命じる。この二人は、伊豆奥野で行われた狩りの帰途にあった祐親・祐通親子を襲撃し、祐親を逃すも、祐通は射られ命を落としてしまう。

祐通の妻は深く悲しむとともに、まだ年端もいかない二人の息子、兄・一万（後の曾我十郎祐成）五歳と弟・箱王[6]（後の曾我五郎時宗）三歳を両膝に乗せ、長じて後に父の敵である工藤祐経の首を取るように諭す。その後、曾我兄弟の母は祐親の説得もあり、兄弟を連れて曾我太郎祐信（すけのぶ）のもとに嫁ぐことになる。このことによって兄弟は正式に「曾我」兄弟となり、自身らが置かれている苦難に満ちた身の上に加え、最初に敵討ちを勧めた母も含

めた周囲の者たちの多くが反対し、さらには敵・工藤祐経が源頼朝の政権下で重用されるようになっていくという厳しい状況下で、二人だけで敵討ちを実行する決心を固めていく。

そして建久四年五月二十八日の夜半、「富士野の巻狩」における頼朝の陣内において祐経を討ち果たし、兄・十郎祐成は討ち死にし、弟・五郎時宗は捕らえられ、頼朝と面会・問答した後に刑死となる。『曾我物語』はその後、十郎祐成と契った遊女・虎を中心とする女性たちの鎮魂の祈りとともに閉じられる。

第二節　敵討ちの端緒

前節において長く『曾我物語』の展開をおってきたが、問題の端緒は「一家の輩」の「所帯」の争いなのであった。伊東祐親には祐継の遺言と利券文書に従わなかったという「欲心」の罪があり、他方、工藤祐経の側にも「一方（ひとかた）ならぬ重恩を忘れて」（四二頁）祐親・祐通親子の暗殺を企てたという点において、「『行く末いかがあるべき』と、神慮も暗に計られたり」（四二頁）という負い目がある。ここで言われている「重恩」とは、「第一には叔父なり。第二には養父。第三には舅。第四には元服親なり。かたがたもって、その重恩報じ難くぞ覚えける」（四二頁）の四点とされている。ただし、『曾我物語』の展開をすでに確認した我々としては、ここで挙げられている四点に加えて、次の二点も指摘できるように思われる。

その第一点として、「訴訟」という手段を自身で選び取っておきながら、それによって定められた「令旨」や「御教書」に不満を持ち従わなかったことが挙げられる。先行研究においても、『曾我物語』内で「訴訟」の手段を選択した者たちが最終的に死に追いやられていくことが指摘されている[7]。第二点としては、祐経が祐親への恨みを祐通の暗殺という形で解消してしまったことを指摘できよう。伊東・河津の所領の相続をめぐる「一家の輩」

の争いは、祐親と祐経との間で発生しているものである。訴訟の結果を不服とし、「父祐継が世までは分けられたることもなき領所を、祐経が世に至って半分の主となるべきやうやある」（四二頁）と思うのであれば、極論めくが、祐経は祐親を相手取って自らの手で直接戦いに挑めば良かったのである。

「祐経、所帯を押領せらるる上、妻室を奪ひ返し、あまつさへ他人に嫁する条、鬱憤あげて計ふべからず」（四三頁）という諸事情を鑑みれば、祐経こそが横暴な祐親に対して自らの正当性・正統性を取り戻す戦いを挑む主人公であり得たかもしれないと考えるのは、それほど行き過ぎた想像とは言えないだろう。というのは、『曾我物語』には、自身の三女が生んだ子である「千鶴御前」でさえも、いまだ源氏の流人に過ぎなかった源頼朝との間に生まれた子だと知るや否や、その幼子を滝の急流の下に簀巻きにして沈めて殺害させるという祐親の「あまりに情なき有様」（九一頁）が描かれているからである。そして、その祐親に対して源頼朝が直々に、「愛子の敵伊東入道が首を刎ねて、我が子の冥途の身代りに手向けん」（九八頁）と敵討ちをすることを誓いそれを実現していくという物語もまた、曾我兄弟の敵討ち話と並行して描かれているからである。[8]

祐経が祐親への鬱憤を祐親の息子・祐通の暗殺という形で解消したことにより、「一家の輩」の争いは所領をめぐる争いから「敵討ち」へと変質してしまった。確かに、「一家の輩」の所領の争いの原因は『曾我物語』の本文の記述通り、伊東祐親の「欲心」の所業に求められるだろう。[9]だが、訴訟によって解決が図られるべきこの所領をめぐる争いを、「敵討ち」という形へ変えたのは、紛れもなく、敵討ちの対象となった工藤祐経当人なのである。そして、敵討ちをされる祐経本人は、自らの所業によって事態が所領の争いから、敵討ちという直接の命のやり取りへと根本から変容してしまっていることに無自覚である。曾我兄弟が自身のことを親の敵と見なして恨みに思っているとの噂を聞き知ってはいるものの、「敵討ち」の標的、換言すると命のやり取りをする戦いの相手として見なされているとは実感していないのである。

それ故に、敵討ちが目前に迫った富士野の巻狩の最終日、十郎祐成の姿をみとめた祐経は、十郎祐成を酒宴の席に招き入れ、「左衛門尉〔祐経〕、酒狂にてやありけん、初対面の詞こそ広量〔傲慢〕なれ」（二七七頁）と評される態度で、次のように語り出している。多少長いが、祐経の人物像や信条のありかがよく表現されている一節である。

「御一門の片端にて候へば、便宜に申し承るべきと存じ候ひしに、いまだ見参に入らざることこそ本意にあらず候へ。まことや、祐経を殿ばらたちの親の敵と宣ふ由。その証拠、何事ぞ。一向、人の和讒にて候ふぞ。ゆめゆめ用ひ給ふべからず。また、さやうに申さんも所以あることも候ふ。この家、祐経こそ嫡々にて候へば、宗徒の所領をも知行すべく候ひしに、故伊東入道殿、皆もって押領しつつ、祐経には屋敷の一所をも分け賜らざりしは、誠に恨みあるべきなり。されども、父子の契りありし上、まさしく叔父にてましませば、思ひながらも、さて過ぎ候ひしに、殿ばらの父故河津殿、伊豆の奥野の狩場の帰りに、流れ矢に当りて失せ給ひし。……されば、一向、祐経が所為となり果て候ひて、殿ばらにも恨みられ奉る。この条、術なき次第なり。自今以後、御不審なく、常に申し承るべし。たとひまた、『恨みを散ぜん』と思ひ給ふとも、さすが当時は叶ひがたくこそ候はめ。かたがたもって詮なき事どもなり。祐経ほどの親類、少なくこそ候はめ。何事をも何ぞ承らざるべき。あの王藤内殿と申すは、西国の人にて、異姓他人にて候へども、頼み給へば、大事の訴訟をも申し叶へ候ひしぞかし。まして申さんや、殿ばらの事どもは子細に及ぶべからず。今は御不審あるべからず。和融し奉らん」（二七七－二七九頁）

祐経の主張の核心は、自身こそが所領を受け継いで当然であったという点に存在している。祐経は、十郎祐成

に立ち聞きされていることに気付かずに、河津祐通の暗殺を指示したことを白状する際にも、「あれが祖父、伊東入道とて、大不得心の者にて、祐経が本領残らず押領せしかば、年来の郎等大見小藤太・八幡三郎、二人の者に申し付け候ひし」（二八一－二八二頁）と、所領へのこだわりの強さを見せている。もちろん、武士として曾我兄弟も、「我らも鎌倉殿の御勘当深く、君にも召し使はれず。先祖の所領をも没収せられ」（二二二頁）と、日々の生活の経済基盤である所領へのこだわりを有しているのだが、それは、「尋常の馬一匹だにも飼ひ得ず」（二二二頁）ということや、着替えの小袖にも不自由するというような、一人前の武士として必要十分な装具すら整えることができないという点に向けたものと言える。それに対して祐経の関心は常に所領へと差し向けられている。祐経の念頭にある争いの源は祐親の「押領」のみなのである。

ここで祐経が見落としているのは、曾我兄弟にとって所領の争いは祖父・伊東祐親と工藤祐経との間で生じたものに過ぎないという点である。所領の争いは曾我兄弟の「敵討ち」とは位相を異にする争いのあり様である。先に述べたように、「一家の輩」で起きた争いはすでに、所領をめぐる争いから父殺しに起因する命をかけた「敵討ち」の争いへと変質してしまっている。曾我兄弟の関心の所在は、最早、所領の受け継ぎには向けられておらず、父を亡きものにした敵・祐経の命を取るというただ一点に向けられている。そしてこの命がけの「敵討ち」の争いにおいては、祐経が得意とする「訴訟」という解決手段は一切無効なのである。

祐経はこの争いの変質に気付いていない故に、自らの命が狙われ、今まさに失われようとしている状況においても、訴訟の際には遠慮することなく親類である自分を頼るようにという、間の抜けた言を口にしてしまっている。その背後には、「当君〔源頼朝〕の御代」（二七八頁）においては、「たとひまた、『恨みを散ぜん』と思ひ給ふとも、さすが当時は叶ひがたくこそ候はめ」（二七九頁）という、源頼朝が築き上げた秩序と、その頼朝政権の中で人後に落ちない地位にあるという自負、そしてそれに起因する驕りと油断があるのだろう。[10]

第三節　敵討ちと見知らぬ父の姿

ところで先行研究において、「この物語を「仇討物語」ないしはそれに類した「仇討文学」というような規定をしたうえで、真正面から論じたものは意外なことに極めて少ない」[11]という。それのみならず、戦前の研究においては、「そのほとんどは「忠孝」というイデオロギーを自明の理として曾我兄弟の行為を評価したきわめて予定調和的な論説」[12]であり、大正四（一九一五）年四月発刊の雑誌「日本及日本人」六五二号は、「三四編にわたる曾我兄弟に対する特集への寄稿のうち二〇編近くはその「忠孝」を賞賛することに当てられている。この賞賛は作品本体の表現には全く踏み込まず、ある意味では全く作品に無頓着な批評であって、ただ父の仇を討ったという一面にのみ光が当てられ、自明の理としての「忠孝」が称揚されるというもの」[13]であったという。

近年の研究においては、このように「忠孝」概念を無批判に称揚することはもちろん、そもそも「忠孝」という概念を軸にして『曾我物語』の主題に迫る考察はかなり少なくなっている。そこでこの「忠孝」概念の代わりに考察の対象とされているのは、真名本系の諸本の各巻の冒頭に共通して付されている「本朝報恩合戦謝徳闘諍集并序」という副題に含まれている「報恩」「謝徳」という概念である[14]。つまり、真名本系の『曾我物語』は、曾我兄弟の「敵討ち」[15]の戦いを、「恩」に「報」じ「徳」に「謝」するものとして捉えていたということになる。そして、この点に関して本論文において注目されるのは、そもそもにおいて、何故「敵討ち」が「報恩・謝徳」の行いと見なされるのかという点である。五郎時宗は敵討ちを果たした後に捕縛され源頼朝の前に連れ出された際に、「縄を付けばとて、何か苦しかるべき。父のために付きたる縄なれば、孝養・報恩の名聞にてこそあるらめ」（三一八頁）とさえ言い放っているのである。

ここで問題となるのが、五郎時宗は三歳で父と死別しているため、父・河津祐通についての記憶をほぼ有して

いないという点である。『曾我物語』は、五郎時宗が、確かな記憶を得る前にこの世から去ってしまった父・河津祐通の姿の残影を追い求める光景を繰り返し描いている。七歳になった箱王（五郎時宗）は、「いかに母御前。父はいづくにおはしますぞや。誠やらん、父の御事は仏になりてましますとな。その仏はいづくにましますぞや。行きて拝まなん。母御前も、いざ、させ給へ」（一四二頁）と口にして母を困惑させている。また、敵討ちに出立する際にも、「十郎殿には、父上の御事、五歳の御時なれば、『たしかに覚ゆる』と語り給ふ。時宗は三歳なれば、たしかに覚えぬだにも、かくばかり恋しく候ふ」（一三七頁）との言葉を残している。さらには、敵である祐経を初めて目にした際に、周囲の僧に、「父の河津に似たるところや候ふ」（一五五頁）と問いかけ、敵・祐経にさえ父・祐通の面影を見出そうとしてしまっている。

それでは何故に、このように父の姿を知らない五郎時宗が、敵討ちへと駆り立てられていくのであろうか。そしてその敵討ちがどうして「報恩・謝徳」の戦いと認定され得たのであろうか。この問題を考察するにあたっての鍵となるのが、稲葉二柄が曾我兄弟の「父の不在ゆえの悲哀感」に即して提示した「欠父の恨み」[16]という定式であるように思われる。曾我兄弟が抱えるこの「欠父の恨み」とはいかなるものであるのか把握するために、まず『曾我物語』の本文を引用しておこう。まずは、先に引いた、箱王が七歳の時に父はどこにいるのかと母に尋ねた場面の続きである。

母、泣く泣く宣ひけるは、「あの曾我殿こそ、己らが父にてあれ」と心強くは語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王、重ねて申しけるは、「父御前は、誠やらん、『狩場より帰り給へる道にて、工藤一郎とやらんに射られて死に給ひぬ』と兄御前は語らせ給ふぞや。当時、鎌倉殿の切り者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとな。我らをも殺さんとや思ふらん。また、我ら

がこの里にありと知らでや過ぐらん」とおとなおとなしく語りければ、母より始めて女房たちまで皆、袖をぞ絞りける。（一四二頁）

継父となった曾我太郎祐信のもとにある箱王（五郎時宗）は、父はどこにいるのかと問い、母は曾我祐信こそが父なのだと涙ながらに諭す。それでも箱王は、父は殺されたのだと兄から聞いたと言い、母の説諭に対して納得するそぶりを全く見せていない。このやり取りの中で注目されるのは、箱王が「兄御前」を介して父と祐経にまつわる暗殺事件についての知識を得ているという点である。すでに述べたように、父・河津祐通の死の時点で箱王は三歳であり、母が幼い子供二人に父の敵を討つように語った際にも、「三歳になりける箱王は、これをも聞き知らずして、ただ手すさみしてぞ居たりける」（七四頁）という状態であった。だが、当時五歳であった一万（十郎祐成）は、「父が死骸をつくづくと瞻（まぼ）り居て、両眼に涙を浮べ、『いつかせめて十五になり、親の敵祐経を狙うてみん……』」（七四頁）と口にしている。つまり一万は、最期の亡骸を含めて親の姿を自らの目で認め、その上で祐経を「親の敵」として理解しているのである。

とは言え、父の姿の記憶を全く持たない箱王・五郎時宗とは異なるものの、それでも一万・十郎祐成はこの時点でまだ五歳に過ぎない。このような、父の姿についての一万・十郎祐成のおぼろげな記憶を、周囲の人々が補強していくことになる。弟・箱王は父の敵・祐経について兄・一万から告げ知らされるのであるが、その兄・一万もまた敵・祐経について周囲の者から語り知らされているのである。『曾我物語』は、「やうやく成人するほどに、父の敵祐経がことを人の語れば兄も知り、兄が語れば弟も知る。心の付きけるままに、いとど安からずぞ思ひける」（一四一頁）と、兄弟の周りの人間が敵・祐経の存在を兄弟の耳に入れていることを語っている。

第四節　「孤児」という自己認識と「実の父」の希求

曾我兄弟は、自分たちが置かれている身の上について、たとえ曾我太郎祐信のもとで暮らしていようとも、兄・十郎祐成も「五郎と某〔自分・十郎〕は、五つや三つの年より孤児（みなしご）となりて」（二九五頁）と、弟・五郎時宗も「生年三つの時より孤児になり参らせ」（二九七頁）というように、両人とも「孤児」であるとする自己認識を有している。曾我祐信も、当然のことながら、曾我兄弟のことを邪険に扱っていたわけではない。曾我兄弟が敵討ちを果たした上で亡くなったと知らされた折には、「幼少、竹馬より身に添へて育てしかば、実子にも劣らず思ひしに」（三三八頁）と悲しんでいる。

曾我祐信の側は曾我兄弟の事を実子にも劣らない存在と見なしているにもかかわらず、当の兄弟二人は自分たちのことを「孤児」と見なしている。このすれ違いはどうして生じているのであろうか。今一度『曾我物語』の叙述に立ち返ってみよう。以下に引用するのは、兄弟が雁金の飛び去る様子を目にし、父の不在を嘆く場面である。

> かくて、夏も過ぎ秋も闌（た）けぬ。九月十三夜の月の隈もなかりけるに、兄弟二人、庭に出でて遊びけるに、五つ列（つ）れたる雁金の、南を指して飛びけるを見て、一万、申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼は交へざりけるは。五つ列れたる鳥の中に一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物言はぬ畜生までも、かくのごとし。我らは人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は実の母なれども、曾我殿は実の父にてなきこそ口惜しけれ。我らが父をば河津殿と申しけんなる。父だにも世におはしまさば、馬・鞍をも賜り弓矢をも持って、今は思ふやうに物をも射歩きなん。我々より幼き者だにも馬・鞍・弓矢を持ちて物を射歩くことの羨ましさよ。これらの事ども思ひ続くれば、いつより今夜は父御前の恋しくお

はしますぞや」とて、袖を顔に当てければ、弟も小賢しく額を合せて泣き居たり。（一四三頁）

右に引いた一節については、鳥にさえ父と母が揃っているにもかかわらず、自分たち兄弟には父が欠けているということを実感して、敵討ちへとのめり込んでいく契機として言及されることが多い。だが、この場面において最も注目するべきであるのは、「母は実の母なれども、曾我殿は実の父にてなきこそ口惜しけれ」と言われている、「実の父」という表現であろう。

「実の父」である河津祐通が生きていれば一体何が実現されていたのであろうか。その具体的な内実についても、右の引用文は示している。その内実とは、「父だにも世におはしまさば、馬・鞍をも賜り弓矢をも持って、今は思ふやうに物をも射歩きなん。我々より幼き者だにも馬・鞍・弓矢を持ちて物を射歩くことの羨ましさよ」というものである。馬・鞍・弓矢という事物を揃えて射歩くことは、まさに「武士」、『曾我物語』で多用される表現に則れば「男」（一四四、一四八、一六八頁他）であることの象徴として曾我兄弟の目に映っている。そして、それらの事物を与えてくれる者こそが「実の父」なのである。

兄である一万・十郎祐成は弟である箱王・五郎時宗に、「我らもいつか成長し、和殿十三、我は十五にだにもなるならば、いかならん野の末、山の奥にてもあれ、親の敵祐経をかくのごとく差し合せて射取りつつ、後はともかくもなりなん。和殿も弓よく射習へ。我も射習はん。弓矢は男の一の能にてあんなるぞ」（一四四頁）と語る。兄・一万は自身も十全に知っているわけではない「実の父」の代理として、弟・箱王に、「男」とは弓矢取る身なのだと、生き方の指針を示しているのである。

「実の父」は馬に乗り弓矢を自在に用いる「男」としての生き方の指針を示し導いてくれる存在である。この点を、もう一つの場面から確認しておきたい。それは、箱王が箱根の宿坊へ入っていた当時、周囲の児には父と

母から「手紙」が届く一方で、箱王のもとへは母の手紙だけが届いていたという出来事を描いたものである。

箱王は余の児どもの文の多きを羨み、側へうち忍びて泣き居たり。その中に、ことに睦じき児に語りけるは、「人は皆、文だにも父の文・母の文とて取り集めて読むなるに、この三か年があひだ、この御山にありつるに、母の御文を見るばかりにて、父の文とて手跡をも見ぬことこそ口惜しけれ。これにつけても、敵の祐経こそ恨めしけれ。一年に一度なりとも、父の御文とて、『学文よくせよ。不調の心あるべからず』などんど戒められたらば、いかばかりか恐ろしくも、また嬉しくもあらん。いづれの文より羨ましきは父の御文なり」と語り続けて涙を流しければ、この児も情なきほど幼き者なれども共に袂を絞りけるこそ哀れなれ。（一五〇頁）

箱王は、自分のもとにだけ父からの手紙が届かないことを嘆き、その元凶である祐経を恨みに思う。ここに見受けられるのは、単なる「欠父の恨み」というよりも、より具体的に「父からの手紙」の欠如への恨みである。「父の御文」は、「学文よくせよ。不調の心あるべからず」という「戒め」がしたためられている「恐ろしい」ものとして、まずもって立ち現れる。そしてそれと同時に「嬉しさ」をもたらすものとされている。「手紙」の恐ろしさが嬉しさを引き起こすものでもあるのは、それが自身の「心」のあり方の戒めとなり、指針となるものだからである。[17] 裏を返せば、「実の父」の欠如は、「善しと誉むる人もなく、悪しと教ふる者もなし」（二四六頁）というように、戒め・指針の欠如として表れるのである。

ここまで確認してくると、曾我太郎祐信が曾我兄弟にとって「父」として認識されなかったことの所以が浮き彫りになるだろう。それは、曾我祐信本人が口にしている、「知行も広からねば分けて取らすることもなく」（三三八

頁）ということによるものではない。曾我祐信は、兄弟にとっての継父であることに遠慮をせず、また「当君〔源頼朝〕」（三三八頁）と伊東祐親との間にある因縁をはばかることなく、曾我兄弟に馬と弓矢を整えてやり、その使い方を指導し、戒めの言葉を与え、「武士」「男」としての生き方の指針を示していれば、曾我兄弟にとっての「男」親である「父」たり得ていたのである。

第五節　敵討ちへと向かう道

ただしこの「男」へとつながる生き方は、曾我兄弟には許されていない生き方でもある。それは、兄弟の祖父・伊東祐親が、今や世を征して「武家の棟梁」（二八八頁）となった源頼朝の「愛子の敵」だからであり、それ以上に、曾我兄弟にとって「男」になるということはとりもなおさず敵討ちへと向かい、命を落とすということを意味しているからである。だからこそ曾我兄弟の母は箱王に、「男になりては汝がためにも心苦しかるべし」（一四八頁）として仏道に入ることを勧めるのであり、母が知らない間に箱王が元服して五郎時宗になった際には、「あな口惜しき者の有様かな。何のいつくしみに〔何が素晴らしいと思って〕男にはなりたるぞ。十郎だにも法師になさざることを安からず思ひ居たるところに、あの者さへ男になりたる悲しさよ。今日より、親ありとも思ふべからず。我もまた、子を持ちたりとは思ふまじきぞ」（一六八－一六九頁）と、五郎のことを思うあまりに勘当までしてしまう。

曾我兄弟の母もまた、「大恩」に「報」じることを説いている（一四六頁）。だが母が口にしているこの「恩」は、河津祐通に受けた「恩」を指してはいない。それは、幼い曾我兄弟の命を源頼朝に懇願して救ってくれた曾我太郎祐信に受けた「恩」なのである。すなわち、母が兄弟に説いている「恩」とは、曾我祐信のおかげで、「汝

らは安穏にて今まで希有の命をば持ちたれ」（一四六頁）ということなのであり、その「恩」に「報」じるというのは、助けられた命を「安穏に」つないでいく営為以外の何物も意味してはいないのである。

この母の言葉を聞いた曾我兄弟は、「目と目を見合わせて顔うち赤めて」（一四六頁）立ち去り、その後は人の目のつく所では敵討ちの件を語り合うことがなくなったという。これは、周囲に敵討ちの企図や計画が漏れ出ないようにする用心という側面も当然含まれているだろうが、それ以上に、敵討ちへと向かわざるを得ないという兄弟の立場と心情が母にすら理解されないもの、兄弟二人にしか共有され得ないものとなっていることを痛感した瞬間なのであろう。

曾我兄弟の母は、兄・一万が元服して曾我十郎祐成という「男」（一四七頁）となる祝いの席で、「彼ら〔曾我兄弟〕が父、世におはしまさば、『河津の何某』とこそ呼ばるべきに、思ひもよらず他家の名を取ることよ」（一四八頁）と口にする。父が生きていたなら「河津」であったのだという曾我兄弟の母の言葉は、逆説的に、母の中では兄弟が「河津の男」となる世は決して戻ることのない、可能性が完全に断たれてしまったあり方として決着していることを示しているだろう。それに対して曾我兄弟は、周囲の者の目には全くもって不可能としか映らない、父・河津祐通の子、河津の男としての存在のあり様の実現を敵討ちの実行に求めているのである。どれだけ周囲の者たちが不可能性を説こうとも、曾我兄弟にとっての父の敵討ちとは、それに挑むことをしなければ、自己の存在が根底から崩れ去ってしまう営みなのである。

先に見た雁金が飛び去る場面で一万が口にしていたように、曾我兄弟の中には、鳥でさえ実の父と母が揃っているのに、人として生まれついたにもかかわらず、自分たちには「実の父」が欠けているという意識が根本に存在している。母は安穏に生きていく道を兄弟に頻りに勧めるが、兄弟にとってそれは、鳥にも及ばない生き方なのであり、とうてい受け入れることのできない道である。曾我兄弟にとっての父の敵討ちとは、「河津の子」「河

津の男」という本来自分たちがあるべき・あり得たはずの十全なあり様につながる唯一の道だからである。「河津の子」「河津の男」というあり様は、最早、敵討ちへと向かう生き方においてのみ実現され得るものである。曾我兄弟の敵討ちは、表層の現れとしては雁金が飛び去る姿を見た出来事などを通じて決意されたものなのであるが、より正確に言えば、母が幼い兄弟を左右の膝に乗せて敵討ちの話をした時や、祐経が大見小藤太・八幡三郎に暗殺の命を出した時よりもさらにさかのぼり、兄弟が河津祐通の子としてこの世に生を受けた時にすでに定められていたものなのである。曾我兄弟による敵討ちは、河津祐通の子として生まれつき、今自身らが存在しているという事実と、不可分に結び付いているのである。

ところで、曾我兄弟の母は兄弟の敵討ちの意志を漏れ聞くごとに「恐ろしく」（一四七頁）思い、敵討ちの実行を留めようとする。その恐ろしさとは当時が源頼朝の治世であることによるものだが、この頼朝政権への過剰とも言える恐れは、すでに確認した兄弟の祖父・伊東祐親の所業がもたらしたものである。曾我兄弟は周囲の人々から「河津の子」としてではなく「伊東祐親の孫」として認識されていた。曾我兄弟の母は、兄弟に対して次のように語り、敵討ちを思い留まらせようと試みている。

「誠か、己らはさも恐ろしき世の中に謀叛を起さんと議し合ふなる。あな、恐ろしや。こは、いかにせん。もし人の耳にも入りなば、よかるべきか。汝らよくよく聞け。己らが祖父伊東入道殿は、当鎌倉殿の若君千鶴御前とて三歳になり給ひしを、松川が淵に沈め奉りし故に御敵となって、先年、伊東の館において失はれ給ひぬ。己ら、かかる謀叛人の孫なれば、敵の左衛門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。……」（一四五頁）

ここに見られるように、当時は源頼朝の世であり、曾我兄弟はその頼朝の敵であった伊東祐親の孫として実の母さえ含む周囲の者たちに認識されていたのである。頼朝もまた、「奴ばら〔曾我兄弟〕が有様を見れば、伊東

入道が振舞ひし昔の思ひ出でられ、遥かに忘れたる我が子のことの思はれて、安からず覚ゆるなり」（二六二―二六三頁）と、曾我兄弟のことを「河津祐通の子」としてはもちろんのこと「曾我太郎祐信の養子」とさえ見ずに、「愛子の敵」である「伊東祐親の孫」と見なしている。継父・曾我祐信が恐れたのも、曾我兄弟が「当君〔源頼朝〕の御勘当深き人々の末」（三三八頁）だという理由によるものであり、何よりも曾我兄弟自身が、「誠に祐成が身の有様を思ふに、日に随ひて世の中あぢきなく覚ゆるなり。その故は、祖父伊東入道、謀叛の身にてありしかば、我らも鎌倉殿の御勘当深く、君にも召し使はれず」（二二二頁）と、自身らの現実のあり様が祖父・伊東祐親の所業と密接に結び付いたものであることを自覚している。だからこそ、『曾我物語』は兄弟の敵討ち話の冒頭で、「然るに、何ぞ、伊豆国の住人伊東次郎祐親が孫、曾我十郎祐成・同じく五郎時宗兄弟二人ばかりこそ」（三五頁）というように、兄弟のことを「伊東次郎祐親が孫」と表現しているのである。

第六節　敵討ちを行うのみの存在へと「思い切る」こと

『曾我物語』を読む我々は、曾我兄弟の父・河津祐通の姿を文字情報を通じて知っている。

伊豆国の住人河津三郎祐通は、生得穏便第一にて、異見を出だすも小賢しく、弓矢の道も尋常なり。容顔美麗にして、芸能、人に勝れたり。大力の剛の者、強弓の精兵、矢継早の手利なり。「我が力に合はん者は希なるべし」と内々は思ひけれども、力の程をば人にも見せず、慎み入りてぞ候ひける。朧気に物言ふこともなく、若き者なれども遊戯もせず、心得澄したる者にぞありける。（五七頁）

当時の武士としては第一級の讃え方で描写されているこの河津祐通の姿を、箱根在留当時の箱王（五郎時宗）もまた、周りの僧を通じて情報としては聞き知っている。

故河津殿は、この殿〔工藤祐経〕より遥かに長高く、太りも増しておはし候ひき。前より見れば胸反りたるが、後ろより見れば俯して、側より見れば正しく四方なる人の眼睛・顔魂、鷹なんどのやうにて、大男にて候ひき。ことに弓馬の道に達し、歩立の達者なり。力の強さも、武蔵・相模・伊豆・駿河三、四か国には肩を並ぶる人もなかりき。（一五六頁）

父・河津祐通の姿を自身で実際に目にしたことがなく、言葉の上での情報のみ伝え聞き、頭の中で想像し思い描くしかないという点において、五郎時宗と現代の我々との間に違いはない。この事情は兄・十郎祐成においても大差ないと言って良いだろう。ただ一点、曾我兄弟と我々で異なっているのは、兄弟にとってはこれが「実の父」の姿に関する問題だということである。

曾我兄弟の現実の規定は「伊東祐親の孫」であり、「河津祐通の子」「河津の男」は失われてしまった本来的なあり方である。その失われた自己の本来のあり方と不可分の「実の父」の実際の姿を兄弟は見知っていない。会田実が指摘しているように、「兄弟は敵討ちを目指す過程の中で父の理想化された幻影を思い詰め、追い求めるという顚倒した父性の克服（とりわけ五郎は）に向かった」[18]のである。

「実の父」の姿を知らないからこそ、父の姿は幻影として理想化され、その理想化された父を追い求める兄弟の思いは敵討ちのみに向けて尖鋭化していく。曾我兄弟は敵討ちの実行へと向かう過程で、「思ひ切り」（一六一頁他）をしていく。この「思ひ切り」という表現は一例を挙げるだけでも、「時宗においては、本より思ひ切っ

たる身なれば」（一八二頁）、「時宗においては思ひ切ったる世の中なれば」（一八四頁）、「ただ一筋に思ひ切り給へ」（二一四頁）、「弓矢取る者は、あまり物を案ずれば、心細くなりて思ひも切られず」（二五〇－二五一頁）、「各々の思ひ切り給へる御気色」（二五六頁）、「思ひ切りて出でし後は、また立ち帰らんとは文にも書かず、言伝にもせず」（三〇八頁）というように、曾我兄弟が敵討ちへと向かう中で繰り返し用いられている。

この「思ひ切り」は曾我兄弟が敵討ち以外の「思ひ」を切り、削ぎ落とし、敵討ちを行うのみの身へと純化していくことを意味しているだろう。特に弟・五郎時宗は、もともと「心様も優美」（一四九頁）と評されていたのであるが、「本より思ひ切ったる身なれば、妻子といふこと叶ふまじ」（一八二頁）と全てを思い切り、敵討ちへとのめり込んでいく中で、いつしか「老ぐみて見ゆるものかな。十郎より老けて見ゆる」（二三五頁）と母に驚かれる程になってしまっている。

曾我兄弟は「世の中」を「思ひ切り」、二度と立ち帰ろうとは考えていない。敵討ちをするのみの存在として自身らを研ぎ澄ましていく。それは、周囲の者たちのみならず自身らにおいても自覚している「伊東祐親の孫」という現実の規定を切り落とし、「河津の子」「河津の男」という、理念的でありかつ本来的である自己のあり方の実現へと向けて純化していく過程なのである。

結

「世の中」を「思ひ切り」、敵討ちをする「河津の子」「河津の男」の実現を目指す十郎祐成・五郎時宗の兄弟は、父の敵・工藤祐経を討つという宿願を見事に果たす。祐経を討ったその後も、曾我兄弟は源頼朝配下の侍を多く討ち倒し、兄・十郎祐成は討ち死にし、弟・五郎時宗は捕縛され頼朝の前に連れ出される。世を治める鎌倉

殿・源頼朝を相手取った一対一の尋問にあたっても五郎時宗は「少しも悪びれたる色〔気おくれがして、恥ずかしい様子や見苦しい行動をすること〕もなく」（三三〇頁）振る舞い、「侍どもが皆、不覚人にて、太刀の影を見て、まづ逃げ足を踏んで候ひつるあひだ、わづかに追ひ様を切って候ひし。尋常に振舞ひて出で来たる者、一人も候はず。……すべて、君は大臆病の侍の限りを召し使はれ候ふものかな。これ体にては、自今以後も、何事につけても危ふく見えて候ふものかな」（三三二－三三三頁）と放言してはばからない。

この五郎時宗とのやり取りを経て、源頼朝は曾我兄弟のことを次のように認定する。

「あれ聞き候へや、各々。あはれ、男子の手本や。これほどの男は、末代にあるべしとも覚えぬものかな。誠に、頼朝においては、これほどの意趣をば存ぜざるべけれども、『ただ今、召し問はれつつ、悪びれたる色を見せじ』とて申したる詞なるべし。種姓、高貴にして心猛き者なれども、敵のために捕はれて後は、心も替り、諂ふ詞もあるものなり。この者においては、悪びれたること少しもなし。これを聞かむ輩、武士の手本にすべし。臆したる者千人より、かやうの者一人をこそ召し使はめ。助けばや」（三三四－三三五頁）

源頼朝は、本論文の考察を通じて幾度も確認してきたように、曾我兄弟の祖父・伊東祐親を「愛子の敵」と見なし、曾我兄弟のことを「伊東祐親の孫」と認識していた。曾我兄弟の「伊東祐親の孫」という現実の規定は、武士社会の最高権力者である頼朝によって支えられていたとも言えるだろう。

だが、物語の終盤に至り、曾我兄弟はまさにその頼朝直々に、周囲の者の誰もが不可能と考えていた「男」「武士」として、それも千人以上の価値を持つ「男子の手本」「武士の手本」として認定されることになる。曾我十郎祐成と曾我五郎時宗の兄弟は、父の敵討ちの戦いにおいて、祖父・伊東祐親の所業の軛を解き、「実の父」を欠く「孤

児」の身の上から「河津祐通の子」としての「男子の手本」「武士の手本」となった。曾我兄弟の敵討ちは、「後代に名を留め」る「報恩合戦謝徳闘諍」となったのである。

本論文における引用および考察は、『新編日本古典文学全集五三　曾我物語』（小学館、二〇〇二年）に拠る。

註

1　本論文における引用文中の〔　〕内の注釈は、『新編日本古典文学全集五三　曾我物語』（小学館、二〇〇二年）の頭注を参考にしたものとなっている。

2　大津雄一「『曾我物語』の成立基盤」『軍記文学研究叢書11　曽我・義経記の世界』（汲古書院、一九九七年）、四九頁。

3　この点について松尾葦江は、「源頼朝の物語」という節題を付した上で、「曽我物語は源頼朝の物語でもあった。真名本の巻二から四にかけて（即ち、がんぜない曽我兄弟が物ごころつくまでの四年間）は、頼朝の伊豆流離説話及び鎌倉幕府成立の記事で占められている」（松尾葦江「真名本曽我物語の世界――真名本とは何かを考える前に」村上美登志編『国文学解釈と鑑賞』別冊　曽我物語の作品宇宙』（至文堂、二〇〇三年）、五〇頁）と指摘している。

同様の言及は、大津雄一前掲論文における、「『曾我物語』の風貌は、確かに軍記物語に似ている。頼朝の

鎌倉幕府体制の樹立の過程と絡み合って物語が展開するからである」（大津前掲論文、四九頁）という指摘や、「巻二中間から巻四の始めにかけての頼朝譚」について、「頼朝譚としては伊豆流離譚・蜂起譚を経て天下掌握までを含む範囲を考察の対象とし、頼朝を主人公とする物語として考察を進める意図のもとにこれを頼朝物語と呼ぶ」考察を展開していく大川信子の研究を挙げることができる（大川信子「『曽我物語』の文芸世界――頼朝譚とのかかわり――」前掲『曽我・義経記の世界』、六七頁）。

また、小林美和はより踏み込んで、「真名本『曽我物語』は、全篇が頼朝体制への賛歌といってよい。もとより、この物語は、曽我兄弟の仇討ちに至る過程をストーリーの中心とするものであるが、物語作者の隠された意図が、これとは別の点にあるとしても、それは格段問題ではないであろう」とする見解を提示している（小林美和「曽我物語の精神風土」前掲『曽我物語の作品宇宙』、一九六－一九七頁）。

5　4

前掲『曽我物語の作品宇宙』、一三頁。

『曾我物語』には大別すると真名本（真字本）と仮名本の二種（論者により、真名本・大石寺本・仮名本の三種類に分類される）が存在しており、さらにそれぞれ多数の伝本に分化して伝えられている。この諸本のうちでも特に真名本と仮名本との間には、物語の展開の仕方や登場人物の造形や描き方において、少なからぬ差異が存在していることが従来の研究でも指摘されてきた。本論文は、諸本の中でも本門寺系の真名本を読み下した訓読本である日本大学蔵本を底本とする『新編日本古典文学全集五三　曾我物語』（小学館、二〇〇二年）に拠って考察を展開している。

なお、『曾我物語』の諸本の分類に関しては、この小学館版『曾我物語』の巻末に付されている解説の他に、坂井孝一『曽我物語の史実と虚構』（吉川弘文館、二〇〇〇年）、村上學「曽我物語の諸本」前掲『曽我物語の作品宇宙』、村上學「『曾我物語』の諸本」前掲『曽我・義経記の世界』、池田敬子「仮名本の世界」前

掲『曽我物語の作品宇宙』、濱口博章「『太山寺本 曽我物語』について」前掲『曽我物語の作品宇宙』、山西明「『曽我物語』の成立」前掲『曽我物語の作品宇宙』、山西明『曽我物語生成論』（笠間叢書、二〇〇一年）などを参照。

6 曾我五郎時宗の「箱王」という幼名については、「箱根」の地名との関係が先行研究において指摘されている。五郎時宗が十一歳で箱根に入山していることを含め、『曾我物語』には箱根を舞台とする場面が多数存在しており、箱根という地が有する意味は今後より一層の研究を要するものと言える。この点に関する近年の研究としては、小秋元段「『曽我物語』と箱根・伊豆権現」前掲『曽我物語の作品宇宙』において、箱根権現（曾我兄弟）と伊豆権現（源頼朝と北条政子）との関係について考察が展開されている。

7 本論文が拠っている小学館版『曾我物語』の巻末解説においても、「物語が、訴訟をする人間たち――祐経は訴訟に積極的に関与し力を発揮する――を最終的に死に追いやっていることは興味深い。訴訟しろと言った京の小次郎にも、他人の敵討に巻き込まれて死に、人々に爪弾きされるというみじめな最期が用意されている」（四〇四頁）と言及されている。

8 ここで指摘した源頼朝の敵としての伊東祐親という真名本系『曾我物語』の構図については、史実との乖離の可能性が坂井孝一によって指摘されている。坂井は前掲『曽我物語の作品宇宙』所収の論文「曽我物語と史実」の中で、『吾妻鏡』の記事と対照させることによって、「祐親はというと、捕縛後一年半近く三浦義澄の許で命を全うしていた。その上、恩赦の言葉まで得ていたのであるから、少なくとも大庭景親や荻野五郎ほど頼朝から敵視されていたわけではなかったといえる。とすれば、祐親を「不忠の敵人」とする「真名本」の人物像は、史実とはやや距離のある描き方、つまり作品の「構想」に属するものとして理解すべきだということになろう」（一九九－二〇〇頁）と唱えている。坂井は同様の考察を前掲の『曽我物

語の史実と虚構』の中でも展開しており（九〇－九六頁、特に九五－九六頁）、我々としてもこの見解に同意するものである。ただし本論文は『曾我物語』に内在する形で曾我兄弟の敵討ちに関する諸問題を考察するものであるため、頼朝にとっての「愛子の敵」としての祐親という人物像については変更していない。

9 小学館版『曾我物語』の巻末解説は、「曾我兄弟の苦難のそもそもの原因は、曾祖父の寂心（工藤祐隆）が後妻の連れ子である継娘との間に男子をもうけて嫡子に立て、伊東の本領を継がせたことにある。兄弟のあずかり知らぬ遥か過去のこの寂心の振舞の代償を、兄弟やあるいは工藤祐経が払わされることになるのである」（四〇〇頁）と、祐親の振舞いよりも一層過去にさかのぼる出来事に、曾我兄弟の敵討ちの淵源を見出している。

10 坂井孝一の研究によれば、工藤祐経は、「都仕込みの特異な能力や経験が、都志向の強い頼朝に高く評価されていた」人物で、「武芸や所領の規模によって有力御家人となった武士たちとは一線を画する存在だった」（ともに坂井前掲『曽我物語の史実と虚構』、一〇九頁）という。祐親によって都に留め置かれたことが、皮肉にも、結果的には源頼朝の政権下で祐経が出世する能力や経験の元となったとも言えるのである。

11 稲葉二柄「『曽我物語』の文芸世界――仇討物語としての構造――」前掲『曽我・義経記の世界』、八七頁。

12 會田実「『曾我物語』研究の軌跡と課題」前掲『曽我・義経記の世界』、四頁。

13 會田前掲論文、一三頁。

14 「報恩」「謝徳」概念についての考察としては、浅見和彦「曽我物語と縁起」前掲『曽我物語の作品宇宙』、一七五－一七六頁・佐伯真一「敵討の文学としての『曽我物語』」前掲『曽我物語の作品宇宙』、三〇九－三一一頁・稲葉二柄前掲論文「『曽我物語』の文芸世界」九一－九三頁・坂井孝一前掲『曽我物語の史実と虚構』、三三－三四頁など。

15 『曾我物語』を論じる際に「仇討ち」の表現が用いられることもあるが、『曾我物語』本文においては「仇討ち」ではなく「敵を討つ」と一貫して表記されている。そこで本論文においても先行研究からの引用を除いて「敵討ち」の表現を採用している。なお、「敵討」と「仇討」の相違から「敵討」の特徴を読み解く論考としては、佐伯真一前掲論文「敵討の文学としての『曽我物語』」を参照のこと。

16 稲葉二柄前掲論文「『曽我物語』の文芸世界」、九三頁。

17 稲葉二柄は前掲論文「『曽我物語』の文芸世界」の中で、「父の手跡の文は、箱王にとっては学問の原動力であり指針である。それが今後とも絶対的に入手不可能であると了解をつけねばならなかった時に、父を殺害したと伝えられる宮藤助経に対する憎悪を急激に増幅させてゆくことになる心情の転換も、こゝでは自然であると言ってよいであろう」（九五頁）と言及している。

18 会田実「曽我物語の基底――真名本を中心に」前掲『曽我物語の作品宇宙』、一二二頁。